賢い人間と素直な人間

動物応用科学科4年 小林 謙斗

小学生のころ、ある遊びがはやっていた。相手に何か質問をし、相手が答えたら、「何で？」と聞き返す。相手が答えたらさらにもう一度「何で？」と聞き返す。永遠と相手が諦めるまでこれを続けるというくだらない遊びである。飽きることなくこの質問を続けていくと、相手はだんだん答えに困り、「宇宙が生まれたから」とか「神様がそうしたから」と答え、最後には結局、世界はどのように生まれたかとか、神はいるのかとか、小学生達はとても答えることのできない根源的な問いにぶつかる。その遊びをして、小学生なりに、すべてのことは完璧には説明できないんだな、と思っていた。

今思えば、高校時代に倫理でならったソクラテスがこれに似たようなこととをやっていたなと思い出した(実際は全く違う方法だが、共通する部分はある、ということ)。「問答法」という。「問答法」とは、反対の立場にある個人間での質問と討論の形式であり、理性的思考を刺激しアイデアを生み出すための質問と回答に基づくもの、らしい。対話者が何かを知っていると思っていることを実は知らないと自覚させることを目的にしている。ソクラテスは人間は世界の全てを知ることはできず、知恵者と評判の人物との対話を通して、自分の知識が完全ではない事に気がついている、言い換えれば無知である事を知っている点において、知恵者と自認する相手より僅かに優れていると考えていた。人間は結局のところは無知であるということは、ソクラテスが死んで２０００年以上たった現代でもあてはまると言って良いだろう。あらゆる学問がこれほど発達した現代でも、どうやって宇宙ができたかわからないし、神の存在に対する認識も人によって様々だ。

この話を思い出しながら、ふと、人間は自分が思っている以上にもっともっと不完全で危ういものかもしれない、という気がしてきた。物事の根本は全然わかっていなくて足元はとてもぐらついているに、そのことをあまり重要でないと思っているし、特に問題ないと思っている人が多いと思う。あるいは、そのことにすら気づかないで、人間社会に潜り込んでどっぷり浸かっている人もいるだろう。また、足元の危うさに気付いて、人間社会から這い出て、足元の問題をどうにかしたいと思ったところで、どうすればいいかわからない。そこで、自分の無知を自覚して…。

世の中には賢い人間と素直な人間がいるという話がある。賢い人間は誰かがつくったルールや常識にそって上手く生きている人間で、素直な人間は自分自身に正直に生きている人間である。この話のように全ての人間を２種類に分けるのはさすがに強引だとは思うが、人間がどう生きるべきかという問題の本質をなかなかついていると思う。人間として生きる以上、ルールや常識にそって生きる能力はとても重要だと思うし、私には足りていない部分だと自覚しているので努力しなければと思っているが、それでも、素直で自分自身に正直な気持ちもできるだけ大切にしていきたいと思う。